



災害弱者



全 泓奎 じょん ほんぎゆ

大阪市立大学
都市研究プラザ教授
大学院
創造都市研究科兼任



災害弱者とは

弱者とは、移動やものの認識において、困難に陥る可能性がある人々を言います。

つまり、高齢者や障がい者、子ども、女性、病弱者を始め、日本語が不自由な外国籍住民も弱者と言えるでしょう。これらの人々は、災害が起きた際は、普段に増して困難を抱えることとなります。しかし、1995年に起きた阪神淡路大震災でも見られたように、普段の生活を支える自治会や町内会など様々な組織がいざという際に命や生活を守るセーフティネットになります。また、東日本大震災の被災外国人への調査の中で、普段、生活適応を手助けしてくれた日本語教室が、外国籍住民の命綱になってくれたという報告もありました。「日常弱



依羅連合町会での コミュニティ防災の取り組み

者」つまり、普段の生活で弱さを抱えている人が、災害の際に最も弱い立場にさらされるのです。

依羅地域は大阪市住吉区の南端に位置し、大阪市立大学が隣接しています。また地域のすぐ南には大和川が流れていて、自然にも恵まれた地域です。しかし、地域の中、とりわけ浅香町には市営住宅が多く、一人で暮らしているお年寄りの方や障がいを持つ方のある世帯が増えていることが問題になっています。

これに対応するため、連合町会では、地域住民が主体的に参加する消火訓練を毎年行っています。この訓練には、連合町会の防災リーダー、女性防火クラブのメンバー、そして住民のみなさんに参加してもらっています。こうした日常生活を取りまく組織による日々の防災活動の積み重ねこそ、コミュニティ防災の心強い備えとなるでしょう。



災害弱者とともに歩む コミュニティ防災の実践

大阪市西成区のある小学校では、40年前より、朝鮮半島にルーツを持つ子ども

たちとの取り組みとして、自主的な民族学級を運営してきました。

地域に外国の人が増え、定住化が進むにつれて、民族学級は多文化共生学級、フィリピン学級へと拡大・発展し、今ではフィリピンやインドネシア、ネパール等、7つの国や地域から来た子どもたちが自らの文化や言葉を学んでいます。地域で共に生きること、「一人ぼっちではなく、あなたも私も住みなれたまちの中でお互いにつながりあっているんだよ!」と力強く言える社会こそ、全ての人を災害から守るコミュニティ防災の在り方ではないでしょうか。誰もが読みやすい看板、自分の文化や言葉だけではなく、相手の文化や生活も考えて手を差し伸べようとする日々の生活の積み重ねが、コミュニティ防災の始まりです。

